

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻

自然と人間の環境史

編 集

宮本真二・野中健一



ブータン東部から、インド北東部のヒマラヤ山脈をのぞむ。3,500 mを超えるところから亜高山帯性の針葉樹が分布し始め、尾根沿いでは部分的に裸地的な環境が出現し、インド北東部のヒマラヤ山脈を望むことができる。この高度では定住村はないが、ヤクの放牧地として、または人の交易ルートとして現在でも重要な空間である。(2010年11月 宮本真二撮影)



海青社

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ(全5巻)

第1巻	自然と人間の環境史	宮本真二(岡山理科大学)、野中健一(立教大学) 編
第2巻	生き物文化の地理学	池谷和信(国立民族学博物館) 編
第3巻	身体と生存の文化生態	池口明子(横浜国立大学)、佐藤廉也(九州大学) 編
第4巻	資源と生業の地理学	横山 智(名古屋大学) 編
第5巻	自然の社会地理	浅野敏久(広島大学)、中島弘二(金沢大学) 編

第1巻 執筆者(50音順、*は編者)

赤石(河角)直美 (AKAISHI(KAWASUMI)Naomi).....	11章
立命館大学 非常勤講師	
浅田晴久 (ASADA Haruhisa).....	13章
奈良女子大学 専任講師	
大浦瑞代 (OURA Mizuyo).....	12章
元 お茶の水女子大学大学院研究院 研究員	
小野映介 (ONO Eisuke).....	1章
新潟大学教育学部 准教授	
門村 浩 (KADOMURA Hiroshi).....	15章
東京都立大学名誉教授	
小泉武栄 (KOIZUMI Takeei).....	16章
東京学芸大学教育学部 特任教授	
古関大樹 (KOSEKI Daiju).....	7章
京都女子大学・立命館大学・同志社大学 非常勤講師	
米家泰作 (KOMEIE Taisaku).....	9章
京都大学文学研究科 准教授	
渋谷鎮明 (SHIBUYA Shizuaki).....	3章
中部大学国際関係学部 教授	
野中健一* (NONAKA Ken'ichi).....	序章、4章
立教大学文学部史学科 教授	
藤木利之 (FUJIKI Toshiyuki).....	6章
福岡大学国際火山噴火史情報研究所 PD 研究員	
宮本真二* (MIYAMOTO Shinji).....	序章、2章
岡山理科大学生物地球学部 准教授	
目代邦康 (MOKUDAI Kuniyasu).....	8章
(公財)自然保護助成基金 主任研究員	
森島 濟 (MORISHIMA Wataru).....	14章
日本大学文理学部 教授	
吉田圭一郎 (YOSHIDA Keiichiro).....	10章
横浜国立大学教育人間科学部 准教授	
渡辺和之 (WATANABE Kazuyuki).....	5章
立命館大学 非常勤講師	

カバー(背景)/玉本奈々(TAMAMOTO Nana) 内面世界を布、色彩で表現する造形作家。主な受賞歴にフランス共和国名誉賞2003/新人賞2004/栄誉賞2005・6、個展に「玉本奈々の世界」(富山県相倉合掌造り集落、2007)、グループ展に「現代美術の展望VOCA展」(上野の森美術館、2004)、著書に「マスクの旅路」(文芸社、2009)などがある。富山県出身、大阪府在住。

シリーズ刊行趣旨

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」は、自然災害への備えと対応、環境と開発、人口増加と食糧、持続的な資源利用、環境変化と生存などの世界が抱えているさまざまな問題の把握と解決に関心を寄せている。このためには、地理学が持っている自然と社会との総合性を追及することが不可欠であろう。これらの背景のもと、本シリーズの編者らが発起人となり2007年に日本地理学会に「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ」が設立された。2000年以降に、生き物や環境問題などを対象とする若手の地理学研究者が多くなったこともその機運となった。最近の地理学界では、対象とする地域や生業を超えて、人間－自然の相互関係をめぐる対話が活発になっている。グループでは発表や議論を通じてこうした話題や研究成果を蓄積してきた。

この成果をふまえ、本「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズは、地球上の各地に生きる人々が形成してきた人間－自然の相互関係を総合的に解明することを目的とし、『自然と人間の環境史』、『生き物文化の地理学』、『身体と生存の文化生態』、『資源と生業の地理学』、『自然の社会地理』の5巻で構成している。地理学を中心に、地域研究、人類学、社会学、農学、林学などを専門とする多分野の研究者が最新の知見をもとに執筆している。

本シリーズの刊行を契機に、従来の学問の枠を超え、人間－自然の相互関係を研究することの大切さと楽しさをアピールし、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究をみなさんと共に発展させていくことができれば望外の喜びである。

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ編者一同
(編者を代表して：横山 智)

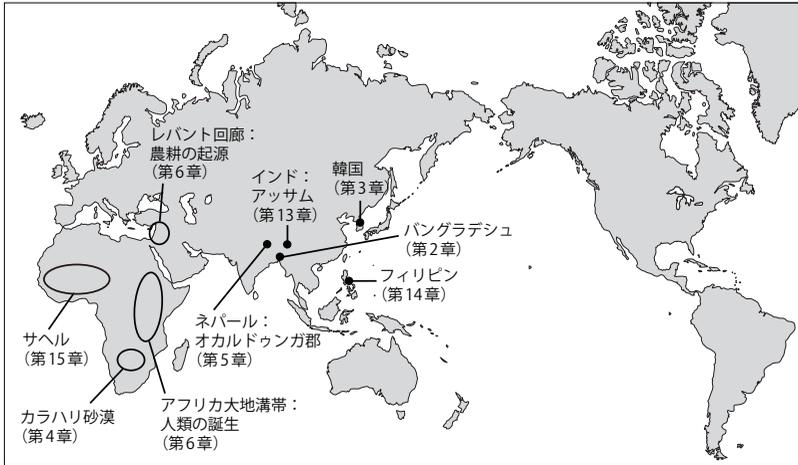
はじめに

本書は、「地理学ならではの環境・環境史研究は何か？」という問題意識にたつて、人々の土地への適応過程、すなわち「人はどこに住まうか」を対象として、それに関わる自然現象や相互規定要因を実証的に究明することをめざしたものである。

現代社会において、地球規模でも地域的でも環境問題は身近な課題となり、問題の解決や保全に向けて諸分野からのアプローチが盛んになっている。地理学でも研究が活発に進められている。多様な対象や分析方法をもち、人文現象と自然現象を統合的に研究する枠組みをもつ地理学は、双方が関連する環境研究を得意とするはずであり、もっと力を発揮しても良い。

そのなかで、「環境史」という領域も興ってきた。ここでは時間軸を重視し「人間と自然との関係性」を正面にとらえてさまざまな学問分野で議論が盛んになっている。現在という「時代」を理解するためには、時間軸のなかで自然と人間との距離感や、関係性の変容や変遷を把握することの重要性が認識されるようになったともいえる。また従来の環境研究では、環境という総体的で認識的なものであるにもかかわらず、環境問題という複雑で多面的な側面をもつ課題に対して一面的なアプローチや自然事象を個別的に分析する自然科学的な方法では解決されないことがわかってきたこともある。それに対して、環境研究の隆盛は、人間側の問題であるという意識にたつた人文社会科学的なアプローチの必要性が再認識されたことによるものと考えられる。それは地理学では「地人相関」と称され古典的かつ本質的な主題であった。地理学は土地のスケールとともに時間スケールをも合わせることも方法論として有している。あらためてその発想と研究方法を生かせるようになったのである。

こうした背景の中で、本書は、生活基盤となる居住やそれを規定する生業活動と自然環境との関連に注目し、世界各地に広がる空間スケールかつ地史・人類史スケールの時間軸からなる事例研究を取り扱う。それは世界の多様性とともにも人類の柔軟な可能性をミクロにもマクロにも時空間スケールで論じ、それ



(各章で言及する主なテーマ)

- 第I部 環境史と居住史
- 第1章 地形発達と低地適応
 - 第2章 低地の土地開発史
 - 第3章 風水による場所選択と環境改善
 - 第4章 狩猟採集民の居住地選択
 - 第5章 移牧のタイプの変化
- 第II部 人為改変
- 第6章 古環境変動
 - 第7章 流路移動と湖沼環境変化
 - 第8章 地すべり・崩壊と暮らし
 - 第9章 焼畑による植生の利用と開発
 - 第10章 植生の破壊と再生
- 第III部 天変地異と対処
- 第11章 水害と復旧
 - 第12章 天明浅間山噴火災害と絵図
 - 第13章 気候変動と稲作体系
 - 第14章 気象と災害
- 第IV部 地理学と環境研究の今後
- 第15章 サヘル気候・社会変動
 - 第16章 地理学と環境研究の課題と今後

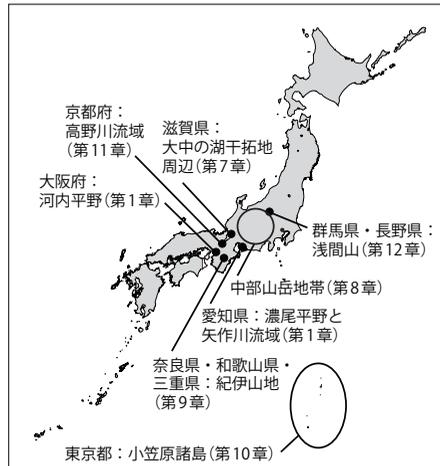


図 本書で取り上げたテーマと地域

らを互いに関連させて一同に論じられる地理学の魅力を示したかったからである。各論文は、地史的スケールの中での変化に応じた人類の適応過程や近年の急速な動きがもたらす影響、マクロな地球史の中であって人々の生きる時代では相対的にミクロな変化であるがそれへの対応的な生活・住まい方の実証、過酷と思われるところでいかに適応的に住むのか、あるいは住むことは単なる自然への適応だけなのか、という問いかけ、水害・旱魃・地すべり・噴火など自然

然災害の現象と被害における自然と人間との関わり方のクリティカルな側面に注目し、その被害対処から災害をネガティブにとらえるだけでなくポジティブにうまく生かす適応的ともいえる生活を取り上げた。

序章では、本書の編者が地理学の研究にたずさわってきた経験をふまえながら、「人間と自然の関係性」を明らかにする環境・環境史研究の意図と可能性について論じた。第Ⅰ部「環境史と居住」では、低地、砂漠、高所さらには風水思想に規定された人の歴史的・文化的な居住のあり方を明らかにした。第Ⅱ部「人為的改変」では、人類の誕生以降、環境(自然)をどのように改変してきたかという過程に着目し、適応・破壊・再生の人々の営為とその背景を解明した。第Ⅲ部「天変地異と対処」では、突発的で予測不能な自然現象にいかに対処しあるいはうまく活用したのか、そしてその現象に挑む科学としてのアプローチを論じた。そして第Ⅳ部「地理学と環境研究の今後」では、日本の地理学研究において長年にわたって環境を正面からとらえてきた代表的な研究者が自らの実践経験をもとに「人間と自然の関係性」研究としてどのように地理学知を生かせるのか展望した。

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究シリーズは、地理学の多方面にわたる関心を掲げ多分野との融合的な研究成果を特徴としているが、この巻はあえて地理学的アプローチにこだわった。それは、先に述べたように環境史研究が多くの分野で進められる中で、地理学的な発想や方法が他分野の人たちに注目されることにより、こんな視点もあるのかと新たな解明のための相互協力が活発になることを願うからである。自然と人文とを相互関連的・統合的にとらえる研究を、そして各論は執筆者自身のフィールド・ワークや、一次資・史料にもとづく文献研究に依拠するものであり、その説得性と現場の迫力を示すのもまた「地理学の魅力」と受けとっていただければ幸いである。

本書では、人々の土地への適応過程、すなわち「人はどこに住まうか」について日本列島はもとより世界各地で「自然と人間の関係」を調査してきた研究してきた者たちが、それぞれの問題設定にもとづき、具体例に実証していく。

対象地域は、砂漠、高山、低地、地すべり地帯などへの土地への適応、自然の改変による適応、災害への対処である。現象も時代も多岐にわたるが、地球という連続体の中でのそれぞれの地、状況のなかで営まれてきた人々の暮ら

し、その暮らしを生じさせた自然環境を理解し、利用して適応してきた実態がフィールドから解明されてゆく。どうか、各章で世界各地の「人間の環境としての自然」に向き合う、フィールド科学としての地理学の視点を堪能していただきたい。

私たちは執筆を進めるさなかに東日本大震災を経験した。文字通り本書の一部をなす「天変地異」を自分事として直面した中で、それにどう向き合うのか、学問として何ができるのか、問題意識を改めて内省することとなった。それは各所に述べられている。

地球上のさまざまな土地、海や水域、雪氷原の地にも人々は暮らしてきた。本書が取り上げることのできたものはその一部にすぎない。さらに想像をふくらませ広大な世界に目を向け、本書を通じて「人間と自然の関係性の解明」や、「環境史」に興味を持ち、それを地理学で究明することを志す人たちが数多く登場すること期待したい。

(宮本真二・野中健一)

このプレビューでは表示されないページがあります。

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻

自然と人間の環境史

目次

本文中で☞印を付した用語には巻末
「索引・用語解説」に解説を付した。

シリーズ刊行趣旨.....	1
はじめに.....	2

序章 人はいかにして住まうか？ 人間からとらえる自然——関係性の地理学の再構築から環境史へ.....	(宮本真二・野中健一) 13
0.1 はじめに：人類史の舞台としての自然に向き合う.....	13
0.2 環境史研究への展開.....	15
0.3 環境史への地理学的分析枠の再構築.....	21
0.4 土地と人の「生き生きとした」姿の解明へ.....	24

第 I 部 環境史と居住史.....29

第 1 章 グレート・ジャーニーの行方：低地居住の過去・現在・未来	(小野映介) 31
1.1 はじめに.....	31
1.2 沖積低地の地形発達史.....	34
1.3 人々は沖積低地をどのように利用してきたのか.....	36
1.4 「自然災害」の多発地帯としての沖積低地.....	47
1.5 グレート・ジャーニーの行方.....	52
第 2 章 低地への適応：洪水を「利用」するベンガル・デルタ.....	(宮本真二) 59
2.1 はじめに：なぜヒトは、低地を選ぶのか？.....	59
2.2 対象地域の概観：ベンガル・デルタ.....	64
2.3 研究の方法.....	66
2.4 結 果.....	66
2.5 考 察.....	69
2.6 おわりに：洪水を「利用」した低地の土地開発史.....	73
第 3 章 「気」を逃さない理想の小盆地：朝鮮半島を中心とした形勢派風水の場所選びと環境改善.....	(渋谷鎮明) 77
3.1 はじめに.....	77

3.2	東アジアに広まった形勢派風水の論理.....	79
3.3	形勢派風水で選ばれる「吉地」：気を逃さない理想の小盆地.....	84
3.4	なおす風水：樹林地や築山で環境はなおる？	88
3.5	まとめ.....	95

第4章 砂漠に住まう：カラハリ狩猟採集民の居住地選択と決定

 (野中健一)	99
4.1	はじめに.....	99
4.2	対象地域の概要.....	101
4.3	カデ地域にみられるキャンプの分布.....	107
4.4	キャンプをどう設けるか.....	110
4.5	自然と社会に暮らす.....	113

第5章 移動のタイプとその変化：ネパールの移牧から..... (渡辺和之) 117

5.1	はじめに：山岳地域における移牧とそのタイプ.....	117
5.2	ルムジャタル村と村の羊飼い.....	122
5.3	放牧キャンプ.....	124
5.4	夏の放牧地.....	126
5.5	冬の放牧地.....	128
5.6	長距離移動と短距離移動.....	131
5.7	変動する放牧地の利用者(1996～1998年).....	133
5.8	羊飼いの変化(2006年と2011年).....	136
5.9	夏の放牧地における利用者変化.....	138
5.10	冬の放牧地における利用者の変化.....	140
5.11	移牧のタイプの変化とその要因.....	143

第Ⅱ部 人為的改変 151

第6章 古環境変動と人類の対応..... (藤木利之) 153

6.1	人類の誕生.....	155
6.2	衣類の出現.....	156

6.3	ヤンガー・ドリラス期と麦作農耕の出現.....	157
6.4	まとめと今後の課題.....	168
第7章	愛知川の氾濫と安土築城期の大中の湖(古関大樹)	177
7.1	はじめに.....	177
7.2	砂州の発達.....	180
7.3	愛知川主流路移動の要因.....	189
7.4	安土築城期の大中の湖の湖沼環境.....	190
第8章	動き続ける大地の利用と対峙(目代邦康)	195
8.1	はじめに.....	195
8.2	斜面変動がつくる日本の地形.....	196
8.3	斜面変動をどう利用するか.....	199
8.4	斜面変動はどう意味付けされてきたか.....	206
8.5	終わりに.....	209
第9章	焼畑による山地植生の利用と開発：17～18世紀の紀伊山地を例として(米家泰作)	213
9.1	はじめに：焼畑という植生遷移のかたち.....	213
9.2	紀伊山地の開発と焼畑.....	215
9.3	植生の遷移と開発.....	219
9.4	森を拓き、管理する.....	229
9.5	終わりに.....	233
第10章	世界自然遺産「小笠原諸島」における植生破壊と再生の環境史(吉田圭一郎)	237
10.1	はじめに.....	237
10.2	小笠原諸島における森林破壊の歴史.....	239
10.3	有用材の択伐による植生変化.....	244
10.4	外来生物による在来植生への影響.....	246
10.5	大洋島における自然環境の保全に向けて.....	250

第Ⅲ部 天変地異と対処 255

第 11 章	近代における農地の水害復旧：京都市周辺を例に (赤石直美) 257
11.1	はじめに.....257
11.2	研究方法.....259
11.3	1935(昭和 10)年の京都市大水害.....262
11.4	近代における水害への対応.....263
11.5	水害と土地所有形態.....268
11.6	おわりに.....272
第 12 章	災害と認識：天明浅間山噴火災害絵図の事例から (大浦瑞代) 275
12.1	災害と人との関わり.....275
12.2	天明浅間山噴火災害.....276
12.3	多様な災害認識.....292
第 13 章	インド・アッサム州、稲作体系と気候変動 (浅田晴久) 297
13.1	はじめに.....297
13.2	アッサム州の気候と稲作.....298
13.3	不安定な降雨と稲作.....301
13.4	気候変動と稲作体系の変容.....308
13.5	気候変動と伝統技術.....315
13.6	地域からみる気候.....316
第 14 章	フィリピンの気象と災害 (森島 済) 319
14.1	フィリピンの自然災害.....319
14.2	降水量の分布と地域性.....321
14.3	近年における極端な降水の特徴.....323
14.4	熱帯低気圧の動向.....326
14.5	熱帯低気圧に対する現地での対応と近年の災害.....329
14.6	まとめ.....332

第Ⅳ部 地理学と環境研究の今後 335

第 15 章	ゆらぐ地球環境の中のサヘル：気候と社会の変動、緑の回復をめぐって(門村 浩) 337
15.1	はじめに.....337
15.2	サヘルとは？ 多様に定義されるエコトーン.....337
15.3	最近の降水変動と大雨洪水・干ばつイベント.....340
15.4	2012年サヘル危機：気候変動と社会的動乱の相乗インパクト.....344
15.5	緑の回復とサハラ：サヘル大緑壁イニシアティブ.....348
15.6	おわりに.....357
第 16 章	自然地理学と人文地理学をつなぐ環境史研究の課題と展望(小泉武栄) 363
16.1	はじめに.....363
16.2	環境決定論との出会い.....363
16.3	『文明の生態史観』.....366
16.4	鈴木秀夫と安田喜憲.....369
16.5	講座「文明と環境」.....371
16.6	環境論の展開.....372
16.7	地球環境時代の環境史研究.....374
16.8	環境史研究において地理学者が果たすべき役割.....378
16.9	おわりに.....384
索引・用語解説 389

序 章

人はいかにして住まうか？

人間からとらえる自然——関係性の地理学の再構築から環境史へ

0.1 はじめに：人類史の舞台としての自然に向き合う

地球上にどのようにして人類が展開し、居住し始めたのか。これは、「人がどこに住まうか」という命題として、「エクメネー」すなわち、可住地(居住地域)の課題として一貫して地理学の大きな関心事であり、「人間活動の歴史はエクメネー拡大の歴史でもあった」(藤岡 1988)。居住とは、単に家を構えることのみではない。土地に居所を定め、生計を立て、帰属する社会に生きていくことである。自然環境からいかに影響を受け、また、それを利用し、適応し、広げていくかという歴史であったと言える。「地理学は、土地の自然から出発し、民族の運命について問いかける」という、18世紀の近代地理学の基礎を確立したカール・リッター(1779～1859)は、自然と人間の歴史とのかかわりを研究する関係の科学をうちたてた(安田 1994)と言えよう。それ以降地理学は、研究対象としての自然、そして人類の歴史を分析し説明することを目指してきた。つまり、生活舞台としての自然環境や、その人間活動への影響を受けさまざまな生活様式を作り上げてきた姿の解明は、地理学の古典的なテーマとして研究が進められてきたのである。

人々が地球の隅々まで到達できるようになり、その結果、人やものの移動が広がり、情報が増大し、グローバル化が進展してきた。しかし、20世紀後半から急速に進んだ公害・環境問題や資源の枯渇問題は、人類の限界をも実感させることになった。各地の人々の暮らしは、地域、文化、時間経過のもとでは一様ではなく、時として、それまでの常識を超えた生活様式であることも次第に明らかになりつつある。我々が認識する近代社会の規範、あるいは、自然地理学的にみれば、けっして安定的ではない高所山岳もしくは、低地への居住

このプレビューでは表示されないページがあります。

グレート・ジャーニーの行方

低地居住の過去・現在・未来

1.1 はじめに

およそ15万年前にアフリカ大陸で誕生した現生人類の一部が同大陸を脱し、グレート・ジャーニーが始まったのは6万年前とされる(篠田 2008)。その後、人類は更新世末期～完新世における激しい自然環境変化の中で各大陸や島嶼へと拡散したのである。その過程でエクメネー(居住域)の平面的な変化とともに、垂直的变化が生じた。高地から低地への移動、低地から高地への移動といった人類の旅の中で無数の都市や集落が誕生して消滅した。

現在、世界各地の都市や集落の分布は死海周辺の海拔-400 mからアンデス山中の4,000 mに及ぶが、その垂直的な分散傾向は一樣ではなく、臨海部への集住が目立つ。特に、全陸域の2%ほどのLow Elevation Coast Zone(臨海部の海拔10 m以下の地域、以下LECZと略記)には世界人口の約10%が居住しており、3,000を超える都市が立地する(UN-HABITAT 2008)。LECZへの集住傾向は、南アジアや東南アジアの途上国や新興国で顕著に認められるが、先進国の中では日本が際立っており、そこには総人口の4分の1に相当する3,000万人近くが居住する(表1-1)。日本では高度成長期以降、中山間地域の過疎化が急速に進行する一方で、臨海部の大都市およびその周辺への集住が進んだ。東京・大阪・名古屋などの大都市圏や地方中枢都市の多くはLECZに住宅街を有し(図1-1)、その範囲は現在も拡大している。

日本のLECZの特徴は、その大半が沖積低地からなる点にある。沖積低地は、過去の気候変動・海面変動・地殻変動などに敏感に対応して形成された場である。なかでも、湿潤変動帯(吉川 1985)に位置する日本の沖積低地は後背地からの土砂供給量が多く、変化が速い。また、沖積低地の変化は先史・歴史時代は

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2章

低地への適応

洪水を「利用」するベンガル・デルタ

2.1 はじめに：なぜヒトは、低地を選ぶのか？

ヒトはなぜ洪水などリスクの高い低地に住むのだろうか。まず、この問いを考えるために図2-1をご覧ください。これはバングラデシュへのサイクロン(大規模台風)の侵入経路を示し、図2-2では、ベンガル・デルタへの集中する水系を示している。この図が連想させるのは、ベンガル・デルタという地域の、サイクロンに伴う高潮災害や、広大な集水域をもつことから来る洪水「災害」である。日本に入ってくる情報では「貧困」、「国際援助」、「被害」が強調されるバングラデシュであるが、その一方で、そこに住み続けている人々の現実・事実がある。このことは、日本を含めたアジア・モンスーン地域に共通した事実である。これをどう理解したらいいのかを、本章では、世界有数の低地であるベンガル・デルタのバングラデシュというローカルな場所から検討する。

日本の戦後地理学の研究史のなかで、門村・武内(1983)によれば、災害を対象とした研究は、第二次世界大戦後に大災害が頻発したという背景もあり、水害の研究は早くから関心がもたれ、1960年代初頭に地理学が対象とするシンポジウムなどが行われた。そのような時代背景のなかで、国土開発による公害問題に代表される開発行為にともなう反作用を防ぐための研究群が蓄積され、地理学の災害研究群もそのような時代背景の中に位置づけられよう。具体的には、「軟弱地盤」の地形学的検討(門村 1968)、「水害地形分類図」(例えば、大矢 1983)や、社会に「有益な研究=役に立つ研究」としての地理学研究として「応用地理学」(西村 1969)などの領域が提唱されてきた。

しかしながら、公害問題から環境問題へと社会的な現在の課題が移行するな

このプレビューでは表示されないページがあります。

第3章

「気」を逃さない理想の小盆地

朝鮮半島を中心とした形勢派風水の場所選びと環境改善

3.1 はじめに

およそ、世界のどのような地域でも、いかなる民族も、自らが住もうための場所を探す何かしらの「自前の」方法を持っているだろう。しかし実際のところ、われわれはそのような「自前の」方法をなくしているように思われる。人間の基礎的な生存条件は、地域や民族による大きな差はないであろうが、環境条件や思想背景など人間側の事情にも影響され、住もうための場所を探す方法は実に多様である。

ところで、住もうための場所を選ぶ方法というもの、おそらくいくつかの手順に分けられるだろう。まず周辺環境の把握をして分析し、その上で住もうための場所を選ぶ。さらにその場所に住みかを作り、それを維持管理してゆくというような手順があるものと思われる。

中国を起源とし、東アジア全域に広まった風水は、住まいや墓を造るための場所や方位を選び、整備することで発福(開運)するための方法である。その目的や論理はともかく、上記の手順への解答を全て持ち合わせており、近代以前から存在する住もうための最も体系化された方法と言ってよいだろう。この風水の「体系化」は、東洋思想である「気」、「陰陽五行」、「易」などをベースになされている。このような理論的背景をもとに、風水では独特の方法で周辺環境を把握・分析し、住まうべき良い場所を選び出す。同時に、「体系化」されている分、一地域の経験的知識の集積ではなく、かなり抽象度の高いものとなっている。

風水は、その目的が、良い場所や方位を選んで、そこに墓や住まいを作ることと「発福」、すなわち家や子孫の繁栄や社会的経済的な成功を成し遂げると

このプレビューでは表示されないページがあります。

第4章

砂漠に住まう

カラハリ狩猟採集民の居住地選択と決定

4.1 はじめに

南部アフリカのカラハリ砂漠に暮らしてきたサン(ブッシュマン)は、狩猟採集を生業として暮らしてきた。そして彼らは広大な砂漠の中、住まいをひんばんに移しながら、一年に何百キロも移動する「遊動」生活を営む人々として知られてきた。

では、この人たちはどのように次に住む場所を定めるのだろうか？ 自然環境から日々の糧を得るための技術や知識の形成と蓄積に関心をもって狩猟採集民の調査に入り、彼らと暮らしをともにしてきた私は、彼らがどこに住まいを定めるのか大きな関心をもった。これは人はどこに住まうかという人類史の原点にもいきつく問題である。その決定要因は、合理的に考えれば、資源に近接し、資源獲得労働を少なくすることであろう。例えば現代の日本であれば代々居住を重ねてきた定住集落、土地代や価格、あるいは通勤地への利便、安心安全や環境アメニティなどが考慮される。だが、動植物の生育が不安定で分散的なカラハリ砂漠のようなどころにおいてはどうか？ 少しでも資源の多いところへと人びとが集中してしまうことはないのか？ はたして、そこが人にとって住みやすいところだろうか？

狩猟採集生活の居住地決定に関しては、居住址のような遺跡の出土から人類居住史やその発展を探るセトルメント・アーケオロジーの分野が作られ、居住パターンと環境適応や社会進化の考証が進められたり(酒井 1990)、現代の諸民族の居住を過去の復元に援用するエスノ・アーケオロジーの分野で関心がもたれてきた(例えば、西田 1989)。民族誌的事例からは、森林地帯、砂漠、北極圏の諸民族グループの住まい方が報告されている(佐藤編 1998)。移動と居住を含

このプレビューでは表示されないページがあります。

移動のタイプとその変化

ネパールの移牧から

5.1 はじめに：山岳地域における移牧とそのタイプ

人はなぜ山に住むのか？「そこに山があるから」というだけでは、おそらく読者の方々は納得しないだろう。世間では「山は住みにくい所」と考えている人の方が、圧倒的に多いからである。本章では地理学の研究成果のなかから移牧いぼくに注目し、この難問アポーリアについて筆者の見解を示してゆきたい。

地理学では山地における垂直利用という研究分野が古くからある。すなわち、人間が自然環境に適應するために、どのように人間が山岳地域の高度差を利用してきたか、地理学者は事例を蓄積し続けてきた。例えば、高い山には雲がかかり、雨が降る。このため、乾燥地でも高い山の麓ふもとでは湧水ゆうすいや伏流水ふくりゆうすいに恵まれることになる。また、山が高ければ高いほど、その高度差のうちに多様な自然環境が含まれる。それゆえ、わずかな時間を移動するだけでも、垂直的に分布する複数の高度帯を利用することが可能となる。

だからこそ、山地を上下移動する移牧の研究は、山地の人々と自然との関係を考える上で、古くから注目されてきた(例えば、ピティ 1955)。戦後は、日本人の研究者によるヨーロッパの牧畜研究も進むと同時に(安田 1958; 小林 1974; 上野 1988; 谷 1996; 池永 1998)、アンデスやヒマラヤを研究する地理学者や人類学者も加わり、山岳地域の牧畜に関する比較研究もおこなわれるようになった(例えば、Rhoades and Thompson 1975; 稲村 1996; 月原 1999; 山本・稲村 2000)。

移牧は山地を季節的に上下移動しながら家畜を飼養することを通常さす。だが、それだけだと山地遊牧との区別がつかない。また、のちに述べるように垂直的な上下移動を伴わない移牧も報告されている。移牧と遊牧の区別については移動ルートが毎年同じか否か、移動が垂直的か水平的か、あるいは定住村を

このプレビューでは表示されないページがあります。

古環境変動と人類の対応

地球誕生以来、地球の環境は一定ではなかった。約6～7億年前には地球全体が完全に氷に覆われていたスノーボール・アース(全球凍結)という時代があったかと思えば(Hoffman *et al.* 1998)、約5,500万年前には北極付近の海面温度が18～23℃まで上昇し、現在の沖縄のような亜熱帯だった時代もあった(Moran *et al.* 2006)。そして約250万年前より氷期と間氷期のサイクルが現れ、約70万年前よりの約10万年周期の寒冷化がゆっくりで温暖化が急激な氷期—間氷期のサイクルが現れてくる(Raymo 1994; Kump *et al.* 1999)。そして約13,000年前に発生した環境の大変動に適応した人類は、急激に発達し現在に至っている。我々の祖先はこのように目まぐるしく環境が変動する時代に生きながらえてきた。果たして人類は環境変動にどのように対応してきたのだろうか？

1980年に「環境考古学」という分野が国際日本文化研究センターの安田喜憲名誉教授によって提唱され(安田 2005)、古環境変動と人類の対応に関する研究は盛んになっていった。そして、この分野を飛躍的に発達させたのは「年縞」の発見であろう。年縞は春から夏に繁茂した珪藻の死骸が湖底に堆積し白っぽい層となり、珪藻が繁茂しない秋から冬には粘土鉱物が湖底に堆積し黒っぽい層となることにより形成される堆積物のことで、白と黒の層が1年の1セットで、樹木の年輪と同じようなものを形成している(図6-1)。この年縞の中には珪藻と粘土鉱物だけでなく、花粉やプランクトン、風成塵など古環境を復元することができるものが多く含まれている。この年縞が1991年に安田名誉教授によってアジアで初めて福井県の水月湖で発見されたのである。この発見以降、日本各地で年縞をもった堆積物が見つかり、古環境変動の研究が飛躍した。

古環境変動の研究にとって年代決定はとても重要なことである。年代決定が

このプレビューでは表示されないページがあります。

愛知川の氾濫と安土城築城期の大中の湖

7.1 はじめに

7.1.1 織田信長による安土築城と大中の湖

琵琶湖東岸の中央に位置する大中の湖は、諏訪湖とほぼ同規模の大きさ(面積 15.4km²)の琵琶湖最大の内湖であった(木村 1968)。戦中戦後の食糧増産のため大半が干拓され、現在はその姿をうかがうことができないが、伊庭内湖・安土内湖・西の湖がさらに接続し小中の湖と総称されていた。伊庭内湖と安土内湖の間の丘陵に、1576年から79年にかけて織田信長が安土城を築いた。

信長が、天下統一のための拠点として安土を選定した理由の一つに、琵琶湖の水上交通の存在が指摘されている。安土築城に先行して、琵琶湖沿岸に城下町を伴った長浜城・大溝城・坂本城が新たに築城された。いずれも港湾機能を備え、羽柴秀吉や明智光秀といった重要家臣が配置されたが、安土は各城からほぼ中間の位置にあり、安土城を中心とした水上ネットワークが構築されていたことが指摘されている(足利 1991; 中井 1992; 佐野 1996)。

琵琶湖が中央に位置する近江では、陸上交通よりも水上交通の方が早く、物資や兵員を大量に輸送することができる。しかし、干拓前の地形図を見ると、琵琶湖と大中の湖の間は砂州で塞がれている。通水路を掘削すれば船の往来は可能だが、この砂州は近江の主要河川の一つである愛知川河口部に位置し、絶えず土砂が流入する位置にあたる。通水路を維持するためには膨大な労力が必要であったはずであり、水運を重要視した信長とかけ離れた印象がもたれる。

このことは、近江をフィールドとする研究者間の疑問点であったと思われる。例えば、藤岡謙二郎は開発史の論考で、考察の中核部分にあたらないにも関わらず、問題の砂州はあまり古くない時期に形成されたと筆を割いた(藤岡 1955)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

動き続ける大地の利用と対峙

8.1 はじめに

日本列島は世界有数の自然災害の多発地域である。その理由の一つは、日本列島の位置がプレートの沈み込み帯にあたり、火山の活動や隆起・沈降といった地殻変動が活発なためである。日本列島の地盤は、これらの地球の変動の賜物である。一方で、この変動は人間にとっては自然災害となる。日本列島はアジアモンスーン地域に位置するため降水量が多い。豊富な水は豊かな生物相をつくりだすとともに、山崩れや地すべりを引き起こす。山崩れや地すべりによって細かく砕かれた岩屑や有機物の混ざった土壌は、水の力によって下流へと運搬され、それが氾濫し平野を作っていく。現在の私たちの生活の場すべてが、過去の自然災害の痕跡といっても過言ではない。

このような地盤の変動、土砂の移動が激しい環境は、地形学者の吉川虎雄により「湿润変動帯」と名付けられた(吉川 1985)。激しく変動する日本列島の自然環境の特徴を一言で表したものである。変動する日本列島、言い換えれば動き続ける大地である日本列島に暮らす私たちは、自然災害から逃れられることはできない。日本列島における環境史の少なくとも一部は、自然災害史と言い換えることが可能だろう。この自然災害の中で、斜面災害は、地震災害や火山災害、気象災害などに比べると、被害の範囲が狭いものの、ほぼ毎年どこかで発生しており、各地にその痕跡が残る身近な自然災害といえる。その発生条件については、過去の多くの事例について知見が集積されてはいるが、現代の科学でもその発生場所や時刻を予測することは大変困難である。今後、地球科学がさらに進歩しても、いつどこで斜面災害が発生するのか、時刻と場所をピンポイントで予測することは難しいだろう。

このプレビューでは表示されないページがあります。

焼畑による山地植生の利用と開発

17～18世紀の紀伊山地を例として

9.1 はじめに：焼畑という植生遷移のかたち

本章では、山村の人々による環境の改変を採り上げる。特に、人にとって有益な形へと山地の植物相を改変する焼畑山村の営みに着目することで、焼畑を通じた森林環境の利用のあり方を、単なる耕地の開発としてではなく、生態的な土地利用の深化として位置づけながら、山地環境の開発と利用について考えたい。具体的には、植生の改変・利用・管理に転換が生じた17～18世紀の日本の山村を例として、山地植生の時間的・空間的な管理を構成する重要な要素として焼畑を捉え、その変化を環境史的に再構成してみたい。

ここでいう焼畑とは、植生を焼いた跡地を畑とし、その後に休閑期間を設けて、植生がある程度回復した後に再び焼いて畑を作るというプロセスを繰り返す農法である。現在もなお焼畑は熱帯の重要な生業として存続しており、その役割が失われたわけではない(例えば池谷 2005; 横山・落合 2008; 木村・北西 2010)。焼畑は植物相が豊かな熱帯に特有の農業であるかのように誤解されることがあるが、本章が示すように日本を含む温帯においても、また北欧のような冷帯においても営まれた歴史がある(Sarmela 1987; Myllyntaus *et al.* 2002)。その意味で、焼畑とはある程度の森林植生があれば成立しうる普遍的な農法であったことを、まず確認しておこう。

しかしながら、焼畑は「森林破壊」や「地力の掠奪」をもたらすと捉えられることが多い。この種の理解は、叢林の育成と確保を目的とする「科学的林学」を背景として形成された面が大きく(米家 2011)、森林保全の思想と結びついて今なお根強く残っている。その一方で焼畑を再評価する研究者は、森林における生業としての有効性を繰り返し指摘してきた(例えば佐藤 1999; 福井 2004)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第10章

世界自然遺産「小笠原諸島」における 植生破壊と再生の環境史

10.1 はじめに

東京の遙か南方の亜熱帯に位置する小笠原諸島には、独自の進化をたどり、地球上でこの島々にしか存在しない動植物が数多く分布する。そこに成立した特異な生態系から「東洋のガラパゴス」とも呼ばれ、2011年6月に小笠原諸島はユネスコの世界自然遺産に登録された。しかし、小笠原諸島の自然環境は世界自然遺産という呼び名に含まれている「世界的にも貴重で、豊かな自然が残された島」というイメージとはかけ離れた歴史を辿ってきた。19世紀以降、小笠原諸島における原生の自然環境は強く人間活動の影響を受け、特に森林は開拓初期から精力的に伐開され、20世紀初頭までの30年程度の間にほとんどが失われてしまったのである。

小笠原諸島を含む世界中の多くの島嶼では、しばしば持続的ではなく、略奪的に森林資源が利用されてきた。その結果、島嶼の森林植生は壊滅的な影響を受けており、元の状態に回復するためには、数十年から数百年といった長い時間が必要だといわれている。特に、小笠原諸島のような大陸と一度も陸続きにならなかったことがなく、生態系が独自の進化を遂げてきた大洋島では人為的な攪乱に対して脆弱であるため(Mueller-Dombois and Loope 1990)、種の絶滅などといった不可逆的な変化が起りやすく、人間による影響を受ける前の状態に回復することができないような重大な植生変化が生じる場合がある(Whittaker 1999)。

島嶼の森林植生を変化させる人間活動はおおよそ次の2つに分けることができる。第1には生息地の破壊である。新たな島嶼に人々が移り住んだ際には、まず居住地を確保し、さらに食料生産のための農耕地が開拓される。面積の小

このプレビューでは表示されないページがあります。

第11章

近代における農地の水害復旧

京都市周辺を例に

11.1 はじめに

本章の目的は、近代を対象とし、①京都市とその周辺で発生した水害について、土地台帳を基に被災地域を復原すること、②水害からの復旧過程について明らかにすることである。

日本は水害の多い国と言って過言ではなく、水田開発史によれば、低湿地や沖積平野への水田拡大が水害の危険性を上昇させたとされる(菊池 1977)。水田をはじめ低地を開発するということは、すなわち洪水と共に生きることを意味した。

歴史地理学における水害研究では、過去の洪水での浸水範囲が復原されてきた。過去の災害を扱う歴史地理学の課題の一つとして、過去における自然災害の復原が位置づけられている(小林・磯 2001)。空中写真の判読やボーリング調査による洪水堆積物の確認、災害絵図や災害誌に記された内容の現地比定といった手法により、浸水範囲が復原されてきた(植村ほか 2007; 平野ほか 1991)。また、提示された洪水地形分類図は現在の治水や水害対策、ハザードマップの作成に活かされてきた(大矢 1994, 1986)。

一方、浸水範囲の特定や被災規模など水害の実態に加え、人々の水害への対応の歴史も注目されてきた。濃尾平野にみられる輪中はその代表的な例であり、築立過程やその機能など人々の洪水対策が知られる(伊藤 2010, 1994)。水防組織も洪水への対応の一つといえるだろう(内田 1994)。

しかし、水害後の状況や水害からの復旧過程や復旧期間といった点は、あまり注目されてこなかった。近世はもとより、国や行政の災害政策が整備され、治水対策が発展しつつあった近代においても、度重なる水害から地主による土

このプレビューでは表示されないページがあります。

第12章

災害と認識

天明浅間山噴火災害絵図の事例から

12.1 災害と人との関わり

災害は人の生命を危機に陥れ、生活環境にも大きな打撃を与える。災害はいつの時代でも各地でさまざまに発生しており、その種類や様相は科学技術の発達や複雑多様化する社会などによって変化する。

災害には、人為災害と自然災害の側面がある。人為作用が誘因となる場合は発生因そのものに対処することが可能で、ある程度は発生数を抑えたり、未然に食い止めたりできる。しかし自然作用が誘因となる場合、発生を抑えることは極めて困難であり、人は警戒・防衛によって被害を最小限にとどめるしか手立てがない。

自然災害は、発生のみを捉えれば自然現象にすぎないが、その影響下に人が居住し被害を受けることで災害となる。具体的には暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火などが挙げられ、高頻度災害は概して小規模であり、低頻度災害は比較的規模が大きい。

災害には、同じ地域で繰り返し発生する傾向がある(高橋 1977: 26)。そのため災害常襲地域では、災害への対応が蓄積・継承され、有形無形の災害文化が培われてきた(田中ら 1986: 9)。過去の災害から被害状況や社会的対応などを学んで現在に活かし、未来に備えたのである。ただし物質的・技術的対策には限界があり、突発的な自然の猛威に対しては為す術がない。そのため、精神的な対応もさまざまにとられてきた。

前近代において、災害や怪異は超越神的存在が起こすとされ、政治や宗教に関連づけられた。儒教的な天命・災異思想が受容された日本の古代律令国家では、災害は為政者の不徳・失政による天譴^{てんけん}とされた。また、災害を占ったり、

このプレビューでは表示されないページがあります。

インド・アッサム州、稲作体系と気候変動

13.1 はじめに

本章ではインド北東地方のアッサム州を対象地域として、稲作体系の変容を通じて地域住民と気候変動との関係性を明らかにすることを試みている。気候変動の影響は住民が技術的に働きかけた結果として稲作体系の変容に表れており、生業活動の変化を考慮に入れることで地域のレベルの気候変動を理解することができる可能性があるのである。

気候学は長期間におよぶ気象要素を解析することで地表のある地点の大気の状態を明らかにする学問であり(日本地誌研究所 1989)、地域の気候変動を明らかにする際にも気象要素の変動を解析することが一般的に行われる。しかし各国で気象観測が行われるようになったのは19世紀後半以降のことであり、多くの途上国では未だ観測網が整備されていないこともあって、気象観測データだけでは必ずしも気候変動を十分明らかにすることができないのが現状である。一方で観測データに頼らない手法としては、動植物の生態の変化からみる手法(吉野・福岡 2003)や古日記など歴史的史料を用いる手法(三上 1993)などもある。しかし、いずれの手法を用いても時間・空間の解像度には限界があり、気候変動を連続的に明らかにすることには常に困難が伴う。

ここで再び気候学の定義に戻ると、気候学とは人間の生活空間を取り巻く気温や降雨の状態を研究する学問であり、人間との関わりを考える点が大気の物理現象を研究する気象学とは大きく異なるのである。「火星に気象はあるが気候はない」のであり「大気現象の中に常に人間の存在を意識」するのが気候学である(福岡 1993)。そこで気象観測データや古日記の分析のような客観的な手法に加えて、人間活動の方面から気候の変化を探る手法を考えてみたい。地域

このプレビューでは表示されないページがあります。

フィリピンの気象と災害

14.1 フィリピンの自然災害

自然災害は都市化、自然環境の破壊、気候変動といった様々な自然・社会要因、誘因の変化に応じて発生する。近年における経済的發展や人口増加などを背景として、アジア地域における自然災害による影響は、世界の中でも特に大きいものとなっている。自然災害データブック 2010年度版(アジア防災センター 2012)によると、2010年における被災者の80%以上はアジア地域に集中し、経済的損失も世界全体の約30%を占めている。東南アジアの中のフィリピンもその例外でない。

表14-1は最近30年間(1982~2011年)におけるフィリピンの自然災害数とその被害を10年ごとにまとめたものであり、これを見ると自然災害全体の事象数は、最近10年間で最も多く、1980年代の2倍以上となっている。この中で、気象災害事象数も同様の傾向を示していることが分かる。ここに集計した気象災害事象は、強風といった直接的に生じる気象災害だけでなく、洪水、土砂災害等も含む二次的な災害も含めているが、この様な気象現象が誘因となって生じた気象災害は、事象数において全体の7割以上を占めていることも分かる。自然災害全体及び気象災害による被災者数も事象数に比例して増加傾向を示しており、気象災害の被災者数が占める割合は事象数同様に高く、全体の9割以上に達している。この様に、フィリピンの自然災害被害全体に対する気象災害被害の割合は極めて高く、近年における自然災害数や人的被害の増加は、気象災害の増加によるものと考えて良い。

気候・気象学的観点に立てば、こうした気象災害の増加が、誘因となる気象現象とどの様に関係し、地域性をもって生じるのかは重要な観点である。特に、

このプレビューでは表示されないページがあります。

第15章

ゆらぐ地球環境の中のサヘル

気候と社会の変動、緑の回復をめぐる

15.1 はじめに

地球温暖化の進行に伴って、地球規模で熱波・寒波・大雨・干ばつなどの異常気候イベントの出現頻度が高まり、世界規模で経済不況・金融危機と食料価格の高騰が続き、アラブ世界を中心に武力紛争が絶えない中、世界最悪の「砂漠化」地帯・飢餓地帯とラベルを貼られたことがあり、いまま後発開発途上国が並ぶサヘルは、最近、どんな状況にあるのか？ アフリカ環境変動研究の一環として、自然地理学から発想した多時空間尺度・分野横断的アプローチ(門村 1993)を援用し、表題のサブテーマに掲げた話題を対象に、web情報を収集・解析して、久しぶりに少し詳しく調べてみた。

本文では、帯状自然地域としてのサヘルの定義を解説した後、自然・社会の両面で、激しく揺れ動いている様子を概観する。ついで、最近の明るい話題のひとつとされる緑の回復(regreening/re-greening)の実態を検証し、サハラサヘル諸国のカリスマ元首たちの政治主導で始まった巨大自然資源管理プロジェクト・「サハラサヘル大緑壁イニシアティブ」の課題に言及する。

15.2 サヘルとは？ 多様に定義されるエコトーン

15.2.1 グローバルな位置づけ

アラビア語で岸や縁を意味するサヘル(Sahel、サーヘルまたはサヘルともよぶ)は、グローバル・スケールの生態系域(ecoregion)区分では、アフリカのサハラ砂漠から南方のより湿潤なサバンナ～疎林地帯(スーダン・サバンナ)への移行帯(エコトーン、ecotone)として位置づけられる、一年生短茎草本の草原

このプレビューでは表示されないページがあります。

第16章

自然地理学と人文地理学をつなぐ 環境史研究の課題と展望

16.1 はじめに

いただいたテーマを改めて見て、これは地理学そのものの現代的な課題と展望を書くことにほとんど等しいではないか、とテーマの大きさにしばし愕然としてしまった。興味のあるテーマなので、お引受けしたものの、いささか安易に考えすぎたと反省しきりである。とはいっても、もはや後の祭り。このテーマにどう対処しようかといろいろ考え、結局、筆者の個人的な体験を中心に記述するしかないだろうということになった。そのため展望というよりも、環境史に関わる研究の流れを追い、それを基に今後の課題を考えてみるということになってしまうが、かつてこんなこともあったのだということをご理解いただき、この拙文でご容赦いただきたい。

16.2 環境決定論との出会い

いささか随想風になるが、1968年頃、つまり今から40年余り前のことから話を始めたい。私が地理学専攻の駆け出しの学部学生だった頃のことである。私は1966年に大学に入ったが、当時の講義に、地理学思想史を中心にした「地理学発達史」という科目があった。この科目でまず教えられたことは、地理学には環境論という方法論があり、それは環境決定論と環境可能論に分けられるが、前者は間違いで後者が正しいということであった。前者の代表はラッツェルやハンチントン、サンプルなどであり、後者の代表はいうまでもなくブラーシュである。

環境決定論がなぜ間違っていたのかというと、地政学と結びついてナチスや

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引・用語解説

略 語

GEF(地球環境ファシリティ)／355

LECOZ(臨海低海拔地域)／31

あ 行

アクティブ・ブレイク／301

アグロフォレストリー・パークランド景観／352 トウジンビエやモロコシなどの畑の中にバオバブやアカシア(ファイデルビア)・アルビダなどの樹木が散生する、あたかも公園のような景観で、西アフリカのサヘル・スーダン地帯に広く見られる。樹木は農民の手が加わった多目的に利用される有用樹(葉や小枝が飼い葉、果実や樹液が食用・嗜好品などに利用され、マメ科樹木では根粒バクテリアが空中窒素を固定して土壤肥沃化に貢献)で、持続可能な半乾燥地農耕システムの中核をなす。[門村]

亜高山針葉樹林／216

アバルジョン／44

アフ稲／300

アフィン変換／282 線形性・位相関係を保持する幾何補正。具体的には線形変換(拡大・縮小、回転、剪断)と平行移動があり、線分内の比は保たれる。清水ら(1999)は、絵図の幾何的歪みを可能な限り自動的に補正し、現代の地図と重ね合わせる手法として、TINモデル(不整三角網モデル)とアフィン変換を組み合わせた幾何補正手法を提案している。[大浦]

案山／86

育成林／216

異常気象／190 数十年に一回おこる大雨・強風・旱魃・日照不足・冷夏などの総称。人の一生でまれにしか経験しない気象現象で人の暮らしに様々な影響を与えてき

た。災害として深刻な悪影響をもたらした一方で、その対策や技術的發展を促した側面もある。温暖化などに伴う近年の状況もさることながら、過去の現象は同じ地域に同じような影響をもたらすことから、歴史的な異常気象の分析やデータベース化が学術的・社会的に高い関心を呼んでいる。[古関]

一筆／259 土地1区画という意味で、「筆」は土地を数える際の帳簿上の単位。一筆という言葉は江戸時代から使われている。検地帳や名寄帳などでそれぞれの地所の記載は「一、地目(上田などの地位を冠し)、反別、耕作者名」と1行に記されており、この一連の記述を一筆(ひとふで)と称したことに由来する。佐藤(1996)を参照。[赤石]

移牧／117 英語でtranshumance。もともとヨーロッパの山岳地域で季節的に上下移動しながら家畜を飼養することを移牧と呼んだ。似たような例はヒマラヤやアンデスにも見られるために比較研究がはじまった。移牧の定義には諸説ある。定住村の有無、移動ルートの固定性、垂直的か水平的かなどの指標で遊牧と区別する説があり、まちまちである。本書では定住村を持ちつつ、家族の一部が家畜を伴い移動することを移牧とした。山岳地域を越えて、平原地域の牧畜まで移牧と呼ぶかは諸説あるが、本書の定義だと、垂直移動を伴わない牧畜も移牧である。[渡辺]

Imagined world／292 → Real world

陰陽五行／77 中国において古代より用いられている世界認識の方法で、陰陽説は世界を陰と陽の二元論で論じ、五行説は世界が木火土金水の五つの元素で成立していると考えられる。風水においては、方位に意味づけをするための根拠として、原理想派の風水を中心として用いられるこ

このプレビューでは表示されないページがあります。

● 編者 ①現職、②学位、③専門分野・研究対象、④著書・論文

宮本 真二 (MIYAMOTO Shinji)

①岡山理科大学生物地球学部 准教授、②博士(理学)、③地理学、環境考古学、環境史、④『鯰(ナマズ)―イメージとその素顔』(共編、八坂書房、2008)、「地理学と環境考古学」(単著、動物考古学 30、2013)ほか。

野中 健一 (NONAKA Kenichi)

①立教大学文学部 教授、②博士(理学)、③環境地理学・環境利用と文化資源、④『環境地理学の視座―“人間と自然”関係学をめざして』(共著、昭和堂、2003)、『民族昆虫学―昆虫食の自然誌』(単著、東京大学出版会、2005)、『ヴィエンチャン平野の暮らし―天水田の多様な環境利用』(編著、めこん、2008)ほか。

Nature and Society Research Series, vol. 1

Environmental History of Nature and Human Activities

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻

自然と人間の環境史

発行日 ――― 2014年3月25日 初版第1刷

定 価 ――― カバーに表示してあります

編 者 ――― 宮 本 真 二

野 中 健 一

発 行 者 ――― 宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2014 ● ISBN978-4-86099-271-2 C3336 ● Printed in JAPAN

● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。